

医者も知らない平穩死



連載²⁹

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『平穩死』10の条件」など。

本人が自宅での平穩死を望んでいる場合、家族には特別な覚悟が必要だ。そう考えている人も多いのではないだろうか？

私は「平穩死に、特に覚悟はいりません。へ歩きながら考える」くらいの軽い気持ちで十分です」と話しています。在宅療養が無理だと思ったら、病院や施設にお願いすればいい。一番避けたいのは、最初から「絶対、無理」と考えてしまうことです。

Aさんは2年前、要介護5のアルツハイマー型認知症のおしゅうとめさんを自

覚悟はいらない

宅でみとりました。「最初は、自宅で、なんて考えていませんでした。義母のためには、きちんとした老人ホームで、専門知識を持ったスタッフに面倒を見てもらうことが一番だと思っていたからです」と、とにかく悔いのないように、と、何軒も施設を見学



(写真はイメージ)

し、決めたのは月30万円の有料老人ホームでした。経営陣のひとりが医師ということが、魅力的に思えたそうです。

ところが、Aさんが入所したお母さんの面会に行く、顔にアザができてることが何度か。スタッフに理由を尋ねても、はっきりした返事はない。

そのうち、お母さんの顔から笑みが消えました。うつらうつらしていることが増えた。これで幸せな最期を迎えられるのか？ そう思ったAさんは、「家に連

れて帰って、私が面倒を見る」と決意しました。

「〈病院や施設に任せておけない〉と思つたんです。でも、自宅介護の知識は何にもありませんでした。当然、覚悟なんて、まったくです！」

全てが初めての経験です。戸惑うことはかりだつたのですが、訪問看護師の手を借り、何とかあれこれこなすうちに、いつの間にか半年が経っていました。

Aさんのお母さんが自宅で過ごされたのは2年間。家族全員に見守られ、眠るように旅立たれました。「あの時の決断は間違っていないかった」と、Aさんは今でも繰り返し嘸みしめています。